

臨地実習において看護学生と高齢者の援助関係が深まる転換点に関する検討

關戸啓子

京都府立医科大学医学部看護学科

A study on the point where nursing students and the elderly help deepen their relationship in clinical practice

Keiko Sekido

School of Nursing, Kyoto Prefectural University of Medicine

要約

入所型の高齢者福祉施設で高齢者との援助関係形成を目的に、看護系大学2年生へ2週間臨地実習を実施している。実習指導中に教員が、学生に「ほとんど介入的な指導をしなくても、良い援助関係を築けていける」と感じる転換点があることに気づいた。転換点と感ずるのは学生に何ができるようになった時点なのか、また、この転換点を迎える時期への影響要因は何かを明らかにする目的で調査を行った。対象は研究協力に同意した看護系大学2年生8人であった。学生の実習記録を、看護学生が「患者に出会う」構造として抽出された6段階を用いて分析した。併せて、高齢者との同居の有無、高齢者に対する感情のアンケート調査と東大式エゴグラムを実施した。

学生の記録に、「患者に思いを巡らす」にあたる記述がみられるようになる時期と、教員が転換点を迎えたと判断する時期がほぼ一致していた。高齢者に肯定的な感情を持っており、東大式エゴグラムで「世話やきタイプ」「適応タイプ」の学生は、実習の早い段階で転換点を迎えていた。高齢者に対して「肯定的」な感情を持っておらず、東大式エゴグラムで「現実無視タイプ」「管理者タイプ」の学生は、実習の後半になって転換点を迎えていた。

学生が、早期に「患者に思いを巡らす」、すなわち、高齢者の立場になって考えることができるように、教員は学生の性格や背景を考慮しながら指導することの重要性が示唆された。

キーワード：看護学生 患者に出会う 高齢者

1. はじめに

核家族化の現代、若い世代だけで形成された家族のなかで育った看護学生は多い。一方、急速に高齢化する日本では、看護学生が将来看護する患者の多くは高齢者であると考えられる。そこで、初期体験の実習として、高齢者との援助関係形成を目的に看護系大学2年生に入所型の高齢者福祉施設で2週間の実習を実施している。その学生指導を数年間に渡って担当する中で、実習開始早期から、この学生へはほとんど介入的な指導をしなくても要介護高齢者（以降、高齢者という）と良い援助関係を築けていけると思える学生と、気になって指導をしていたが実習最終日近くになって、何とか援助関係が築けたかなと思える学生がいることに気が付いた。初期体験型の実習の学びや意義¹³⁾の報告はあるが、その実習において学生はどのように援助関係を築くのか、その機序に目を向けた研究はない。そこで、本研究では、白水ら⁴⁾の看護学生

が「患者に出会う」構造をもとに、学生の記録を分析することによって、看護教員がほとんど指導しなくても大丈夫と感ずる時期（便宜上、転換点という）は、学生がどのようなことができるようになっているのか、また、転換点を迎える時期が学生によって幅があるのはなぜかを明らかにしたいと考えた。

2. 目的

高齢者福祉施設における実習指導で、教員が学生に「ほとんど介入的な指導をしなくても、良い援助関係を築けていける」と感じる転換点とは、学生に何ができるようになった時点なのか、また、この転換点を迎える時期への影響要因は何かを明らかにする。

3. 方法

1) 対象者

看護系大学2年生の8人を対象者とした。

2) 研究対象の実習について

初期体験実習として入所型の福祉施設において看護学生に実習を実施している。看護系大学2年生が対象で、グループにわかれて、夏期に2週間実習を行う。7～8人程度が1グループとなり、グループごとに違う施設で実習を行う。1グループに1人の教員が学生と一緒に施設に行き、実習期間中指導にあたる。実習は、施設職員と一緒に援助を実施したり、行事に参加したり、コミュニケーションをとったりと、施設のスケジュールにそって高齢者と接し、援助関係を築いていくことが目的である。記録は、学びや感想を自由に記載する形式である。

3) 調査方法と分析方法

学生指導中に、この学生へはほとんど介入的な指導をしなくても、良い援助関係を築けていけると感じた日を、学生ごとにメモしておいた。

学生の実習記録から、学生が高齢者と援助関係を形成する過程を分析した。分析には、白水ら⁴⁾が、看護学生が「患者に出会う」構造として抽出した6段階を用いた。この6段階は、①患者と会う:物理的に会うこと、②患者の気持ちに“は”とする、③患者に思いを巡らす、④患者に働きかける、⑤自分の存在を実感する、⑥次に繋がる目標がある:次はこうしたいという意味、で構成されている。学生の実習記録は、自分が実施したことのみや、施設のスタッフを見て援助についてわかったことなど、高齢者との出会いに直接関係のない記述もされている。今回は、高齢者と接したときの記述のみを分析対象として、すべてを抜き出した。1つの出来事について記述されているまとまりを、分析の1場面とした。その内容が、6段階のどこかにそのまま当てはまるときは、該当の番号を付した。1場面の中に、出会いの段階が存在するときには、意味が通じる最小の文章を1文として、1文ごとに該当の番号を付した。学生の記述が「患者に出会う」構造のどの段階に該当するのかは、文章の前後とも照らし合わせながら熟考し、学生指導にあたった教員1人が行った。その後、教育学の教員からスーパーバイズを受けた。

また、転換点を迎える時期への影響要因として、高齢者との同居の有無、高齢者に対する感情(捉え方や過去の思い出、関わり)についてアンケートへの記載を求めた。さらに、東大式エゴグラム

(TEG:Tokyo University Egogram)を実施した。東大式エゴグラムは、多変量解析によって質問項目を選定し信頼性、妥当性をもって数量的にエゴグラム理論を発展させたもの⁵⁾である。東大式エゴグラムには、回答結果から導き出された人格特徴を簡潔に解釈できるパターン分類が示されており、学生の性格傾向を把握するために用いることとした。

4) 倫理的配慮

研究の目的と方法、倫理的配慮について当該の実習責任者に口頭で説明し、事前に許可を得た。

学生には、当該実習の単位認定(成績評価)が学生に示された後に、個別に研究の趣旨・目的・研究協力は任意であること、調査結果は記名ではなく記号が付されて分析されること、参加の有無による不利益がないこと、成果は学会や論文として発表されること、発表時に匿名性が確保されること、を口頭で説明した。研究協力に同意した学生には、返却していた実習記録の氏名部分以外をコピーして、好きな記号を付して指定の提出用の箱に入れるように依頼した。その時に、アンケート調査用紙とTEGの用紙にも同じ記号を付して提出するように説明した。この提出によって、研究協力に同意したとみなした。

4. 結果

研究協力は、実習指導を担当した学生8人、全員から得られた。

学生8人のうち、女性が7人、男性が1人であった。TEGをパターン分類⁵⁾でみると、「世話やきタイプ」が1人、「適応タイプ」が5人、「現実無視タイプ」が1人、「管理者タイプ」が1人であった。高齢者との同居は、同居している学生が4人、同居していない学生が4人であった。高齢者に対する感情の記述から、高齢者に対して、優しい、好きなど「肯定的」であった学生は4人、やさしい、おせっかいなど良い面と困る面の両方の記述があった(便宜上「中間的」とする)学生は2人、嫌い、腹が立つなど「否定的」であった学生は2人であった。

表1に「看護学生と要介護高齢者の出会いの段階—経時的变化—」を示した。実習1日目から8日目(1～4日が1週目、5～8日が2週目)の実習記録を分析した結果、「患者に出会う」6段階のうち、どの段階にあたる記述がなされていたかを、①～⑥で示している。二重線で囲まれている日は、指導教員が、学生

表1 看護学生と要介護高齢者の出会いの段階 一経時的変化一

学生の背景		実習日	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目	6日目	7日目	8日目
A (女)	TEG:世話やきタイプ 高齢者:同居あり 肯定的	①①	①①	② ③ ④	③	③ ④	②⑤ ③⑥ ④	⑤ ⑥	③ ④ ⑤	⑥
B (女)	TEG:適応タイプ 高齢者:同居なし 肯定的	①①	① ② ③	④ ⑤	④ ⑤ ⑥	② ③ ④	② ③	②② ③③	④ ⑤ ⑥	④ ⑤ ⑥
C (男)	TEG:適応タイプ 高齢者:同居なし 肯定的	①①	① ② ③	① ② ③	② ③ ⑥	①④ ② ③	④ ⑤ ⑥	②⑤ ③ ④	③⑥ ④ ⑤	④ ⑤
D (女)	TEG:適応タイプ 高齢者:同居なし 肯定的	① ②	② ③	②⑤ ③⑥ ④	②⑤ ③⑥ ④	③ ⑥	③ ④ ⑤	②⑥ ③ ⑤	④ ⑤ ⑥	④ ⑤ ⑥
E (女)	TEG:適応タイプ 高齢者:同居なし 中間的	①① ②②	① ②	① ② ③	①④ ② ③	①④ ② ③	③ ④ ⑥	① ② ③	④⑤ ⑤ ④⑤	④ ⑤ ⑥
F (女)	TEG:適応タイプ 高齢者:同居あり 否定的	①	①①	②③ ③④ ⑤	③ ④ ⑤	②⑥ ③ ⑤	④ ⑤ ⑥	④ ④	④ ④	④ ⑥
G (女)	TEG:現実無視タイプ 高齢者:同居あり 中間的	①	① ② ③	①①	①	①	④	② ③	④	④
H (女)	TEG:管理者タイプ 高齢者:同居あり 否定的	①	①①	①①	①①	②	② ③ ④	②⑤ ③ ④	⑤ ⑥	⑤ ⑥

注) ①～⑥は、出会いの6段階のうち、どの段階に該当するかを示している。①患者と会う：物理的に会うこと、②患者の気持ちに“は”っとする、③患者に思いを巡らす、④患者に働きかける、⑤自分の存在を実感する、⑥次に繋がる目標がある：次はこうしたいという意味

指導中に、この学生へはほとんど介入的な指導をしなくても、良い援助関係を築けていけると感じた転換点である。学生A・Bは2日目に、学生C・Dは2～3日目に、学生E・Fは3日目に、学生G・Hは6日目に転換点を迎えている。学生の記録に、③患者に思いを巡らす、にあたる記述がみられるようになる時期と、教員が転換点を迎えたかと判断する時期がほぼ一致していることがみてとれる。

また、高齢者との関係をみると、高齢者に対して肯定的である学生は2～3日目に転換点を迎えていた。TEGでみると、「現実無視タイプ」と「管理者タイプ」の学生は、実習6日目に転換点を迎えていた。

資料1～4には、参考として学生の記録を一部分抜き出して、どのような記述が「患者に出会う」6段階のどの段階にあたるかと判断されたのか分かるように示した。ただし、記述は内容が損なわれない程度に実際

の記述を簡略化してある。

5. 考察

学生の記録に、③患者に思いを巡らす、にあたる記述がみられるようになる時期と、教員が転換点、すなわち、この学生にはそんなに積極的に指導的な介入をしなくても、見守る程度で、高齢者との援助関係を形成していけるだろうと判断する時期がほぼ一致していることがわかった。患者に思いを巡らすとは、患者の言葉に込められた気持ちを推察する、患者の経験を自分に置き換えて考えること⁴⁾である。学生が高齢者の立場でものごとを考えられるようになると、学生は何をすべきか能動的に判断し、実習での学びが深まっていくと考えられた。白水⁶⁾も、「思いを巡らすことによって、学生は知的関心から相手の立場に立つて行う看護実践を生み出す」と述べ、③患者に思いを巡らす

段階が「患者に会う」構造において重要な意味を持っていると説明している。

この転換点を迎える時期には、学生によって差があった。2～3日目で転換点を迎えた、学生A・B・C・Dの記録（資料参照）をみると、4人とも1日目には、あまりうまくできなかったことが記述されている。しかし、2日目には、4人とも高齢者の立場で考えて援助を実施している。4人とも高齢者に肯定的な感情を持っており、TEGも「世話やきタイプ」か「適応タイプ」であった。もともと高齢者が好きで、世話好きやその場への適応力に優れていると、早い時期から高齢者の立場になって考えることができ、援助的な関りができることが示唆された。

学生E・Fは、3日目で転換点を迎えている。学生A・B・C・Dとの違いは、高齢者に対して「肯定的」な感情を持っていない点である。記録（資料参照）をみると、2日目まで、思ったような行動はとれず、どうしたら良かったのか反省するような記述がある。3日目には、施設の方や高齢者の方に後押しされたこともあり、気づきが進んで転換点に達していることがわかった。失敗を次に生かそうとする気持ちを学生は持っているため、高齢者の楽しそうな様子など、高齢者に対して学生が持っているイメージが少し変わるような体験が重要であると考えられた。

学生G・Hは6日目に転換点を迎えている。実習5日目まで、①患者と会う：物理的に会うこと、に該当する記録（資料参照）がほとんどであった。高齢者に対して「肯定的」な感情を持ってなく、TEGも「現実無視タイプ」と「管理者タイプ」であった。学生Gは、2日目に施設職員の言葉から、1度③患者に思いを巡らす段階の記述がみられるが、その後3日間①患者と会う：物理的に会うこと、に該当する記述が続く。援助することに戸惑い、他者からの支持を待つ姿勢になっている。5日目に自分で考えて行動する必要性を言われたことが、6日目の援助の実施につながったことが推察される。そこには、5日目までの経験が生かされたことが記述されており、学生なりにどうしたら良いか考えていたが、行動や記録には出てきてなかったことが予想される。臨地実習では、初心の学生は自信がなく不安をいんでいる⁷⁾ものである。まして、高齢者対象の実習では、対象者の反応が不明確であり、ケアをしても良いのか戸惑うことが報告⁸⁾されている。学生の行動だけで判断しないで、学生の考えを確認しながら指導を行うことの重要性が示された。学生Hは、「管理者タイプ」であることが反映された記述

が多い。入浴方法に対する意見や、高齢者からの感謝の言葉が施設職員にとってうれしいことであるなど、考え方が高齢者の立場からとはならなかった。高齢者の方から積極的に接してもらえて、高齢者の立場で考えられるようになっていったと思われる。しかし、一度③患者に思いを巡らすことができてからの、援助関係の深まりは早かった。学生の視点が、管理的な視点から、対象者の理解へと変わってからは、援助関係形成が一気に進んだと考えられる。ここでも、③患者に思いを巡らす、ことへ早く学生を導くことの重要性が再確認された。

学生が、早期に「患者に思いを巡らす」、すなわち、高齢者の立場になって考えることができるように、教員は学生の性格や背景を考慮しながら指導することの重要性が示唆された。

6. 研究の限界

本研究の発想は、1実習指導教員の気づきによるもので、かつ、分析対象は、その1教員が実習指導した1施設で実習した8人の学生のみである。また、分析は1教員が行っており、客観性や妥当性は十分とはいえない。

あくまで実践の報告であり、結果が全ての実習指導に適用できるものではないと考える。しかし、今回示された報告は、学生指導の一助になる実践例であると考えられる。

7. 結論

高齢者福祉施設における実習指導で、教員が学生に「ほとんど介入的な指導をしなくても、良い援助関係を築けていける」と感じる転換点とは、学生に何ができるようになった時点なのか、また、この転換点を迎える時期への影響要因は何かを明らかにする目的で、看護系大学2年生8人の実習記録を分析した。記録の分析には、看護学生が「患者に会う」構造として抽出された6段階を用いた。併せて、高齢者との同居の有無、高齢者に対する感情のアンケート調査とTEGを実施した。

- 1) 学生の記録に、「患者に思いを巡らす」にあたる記述がみられるようになる時期と、教員が転換点を迎えたと判断する時期がほぼ一致していた。
- 2) 実習2～3日目で転換点を迎えた学生は4人で、高齢者に肯定的な感情を持っており、TEGは「世話やきタイプ」が1人、「適応タイプ」が3人であった。

- 3) 実習3日目で転換点を迎えた学生は2人で、高齢者に対して「肯定的」な感情を持っておらず、TEGは「適応タイプ」であった。
- 4) 実習6日目に転換点を迎えた学生は2人で、高齢者に対して「肯定的」な感情を持っておらず、TEGは「現実無視タイプ」と「管理者タイプ」であった。

学生が高齢者の立場に立って考えられるようになると、教員は転換点であると感じていた。この転換点を迎える時期には、高齢者に対する好き、嫌いなどの感情や性格傾向が影響していた。

文献

- 1) 桜井礼子, 山口真由美 (1999): 看護教育における初期体験実習の経験と意義, 大分看護科学研究, 1 (1): 20-26.
- 2) 相撲佐希子 (2016): 1年次前期の基礎看護学実習が初期学生の「学び」と職業に対する「思い」に及ぼす影響, 日赤看会誌, 16 (1): 41-46.
- 3) 浅井直美, 小林瑞枝, 荒井真紀子 他 (2007): 看護早期体験実習における学生の意味化した経験の構造, Kitakanto Med J, 57: 17-27.
- 4) 白水麻子, 山下香枝子 (1999): 臨地実習で看護学生が「患者に出会う」構造, 日本看護学教育学会誌, 9 (2): 81.
- 5) 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会(編)(2002): 新版 TEG 解説とエゴグラム・パターン, 東京: 金子書房.
- 6) 白水麻子 (2000): 臨地実習で看護学生が「患者に出会う」構造 (第二報), 日本看護学教育学会誌, 10 (2): 154.
- 7) レバド トニエ, マーサ A トンプソン 著 (中西睦子, 荒川唱子 訳) (1993): 看護学教育のストラテジー, 東京: 医学書院.
- 8) 石垣範子, 深江久代, 今福恵子 他 (2012): 介護老人保健施設での老年看護実習における学生の困難感について, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 26: 43-55.

資料 1

看護学生と要介護高齢者の出会いの段階 一経時的变化一 (1)

学生 A TEG:NP 優位 (世話やきタイプ) 高齢者:同居あり 肯定的 (優しい、好き)							
実習 1 日目	実習 2 日目	実習 3 日目	実習 4 日目	実習 5 日目	実習 6 日目	実習 7 日目	実習 8 日目
<p>①寮母さんの食事介助を見学。</p> <p>①話しかけながら、食事介助をする。食事介助はうまくできたが、話しかけに返事はなかった。</p>	<p>②食事介助中、食事を拒否される。拒否の言葉に傷ついて自分は大それた不安に思う。⇒③「食べて」としか言わなかった自分の言動に気づく。高齢者の方は楽しく食事したいのではと思ひ、⇒④世間話しながら介助したらうまくできた。</p>	<p>③高齢者の方が一生懸命話して下さっても、うまく聞き取れないことがある。何度も聞くのも申し訳なくて、何となく話を合わせることに喜んで下さるが、それで本当に良いのだろうか。</p>	<p>③入浴を介助されるなどの恥ずかしい思いをする時には、自分なら声をかけて欲しいと思う。⇒④初めてのリフト浴の介助に精一杯であり、不十分だったが話しかけながら行った。</p>	<p>②高齢者の方に外の暑さの状況を聞かれる。⇒③毎日室内で過ごすので、季節を直接感じられないことに気づく。⇒④盆踊りの練習に誘ってみよう。⇒⑤行事の大切さに気づく。また、行事では介助する者、される者ではなく一緒に楽しむ雰囲気大切。⇒⑥明日のレクリエーション(学生が企画)でも一緒に楽しめる場作りを目指す。</p>	<p>⑤レクリエーションでは、高齢者の方々から積極的な反応がみられ、盛り上げて下さるという場面もあり、一緒に楽しむことができた。⇒⑥今後の高齢者の方々とふれあいに生かしたい。</p>	<p>④高齢者の方が過去の苦勞等を話して下さった。聞き役をしていた。⇒③不安な気持ちがあることが窺われた。⇒⑤話はずみで、明日も話すことを約束すると楽しみにしておられる様子だった。コミュニケーションがとれたと実感できる時間だった。</p>	<p>⑥自分の目で見て、手で触れて話してという実習をとおして、高齢者の方への接し方を学ぶことができた。体験することによって理解するという実習の大切さもわかった。今回体験したことを生かしていけるように頑張りたい。</p>
学生 B TEG:平坦型 (適応タイプ) 高齢者:同居なし 肯定的 (優しい)							
実習 1 日目	実習 2 日目	実習 3 日目	実習 4 日目	実習 5 日目	実習 6 日目	実習 7 日目	実習 8 日目
<p>①食事介助では私がすると「おいしくない」と言って食べてもらえなかった。</p> <p>①おむつ交換は寮母さんがするのをまねて手伝うのが精一杯だった。</p>	<p>①入浴介助では機械の操作を覚えた。高齢者の方は自分から危険を避けることができなかったので正確に行わなければならない。⇒②もっと、ゆっくり入浴できたら良いと思った。⇒③高齢者の気持ちに少しでも応えられるように介助したいと思った。</p>	<p>④入浴介助の時それぞれの高齢者の方に合わせた話しかけを工夫した。⇒⑤普段見られない面も発見でき、信頼関係を築くのに良い機会だと思った。</p>	<p>④慣れて行動に余裕ができたためか、何か援助すると高齢者の方から反応が返ってくるようになった。⇒⑤毎日積み上げる信頼関係の大切さを感じた。⇒⑥援助する喜びを感じた。高齢者の方への個別の接し方を工夫したい。</p>	<p>②高齢者の方に話しかけて反応がなくても、よく観察すると表情とかで何かメッセージを伝えようとしていたことがわかった。⇒③頻りに話しかけることが大切だとわかった。⇒④入浴介助時話しながら、洗うようにした。</p>	<p>②高齢者の方が言っていることが聞き取れない場合がある。⇒③高齢者の方もつらいと思うし、聞き取れないまま自分もつらい。</p>	<p>②レクリエーションに参加する時の表情は、居室と違い生き生きしている。⇒③毎日変化のない生活ではレクリエーションはなくてはならない楽しみである。</p> <p>②高齢者の方の出来ない面ばかり記録していたら、⇒③寮母さんから「できる所を見るように」と教えられた。</p>	<p>④この実習で学習したことを復習しながら援助を行った。⇒⑤高齢者の方の特徴を受け入れることができ、愛情を持って接することができるようになったと思う。⇒⑥今回、身に付けたことを忘れずに、これからの実習に役立てていきたい。</p>

注) ①～⑥は、出会いの6段階のうち、どの段階に該当するかを示している。①患者と会う：物理的に会うこと、②患者の気持ちに“は”っとする、③患者に思いを巡らす、④患者に働きかける、⑤自分の存在を実感する、⑥次に繋がる目標がある：次はこうしたいという意味

資料 2

看護学生と要介護高齢者の出会いの段階 一経時的变化一 (2)

学生C TEG:M型(適応タイプ) 高齢者:同居なし 肯定的(優しい、好き)							
実習1日目	実習2日目	実習3日目	実習4日目	実習5日目	実習6日目	実習7日目	実習8日目
①食事介助では高齢者の方のペースがつかめず困った。 ①高齢者の方とコミュニケーションをとったが一方的に自分が話していたように思う。	①入浴介助をした。高齢者の方の安全に配慮しながら行った。⇒②③高齢者の方のリラックスした表情や笑顔を見て、何ともいえずうれしかった。	①高齢者の方とのコミュニケーションがうまくとれる時とだめな時がある。⇒②笑顔の時は良いが、悲しそう顔をされるとどうして良いかわからない。⇒③どこまで聞いても良いのか、会話が負担になっていないかよく考えてみたいと思った。	②レクリエーションでは、ベッドにいる時とは違った笑顔が、高齢者の方に見られた。⇒③高齢者の方にあつた歌や理解しやすい話、興味を損なわない構成のためだと思つた。⇒④このようなことを、自分は会話の中で応用して活用していきたい。	①爪きりをした。⇒②どの位切りますかと聞いたら、高齢者の方は「目が見えにくいのでわからない」と言われた。⇒③自分なりに、靴下をはいて邪魔にならない位が良いと判断し、⇒④爪きりを行った。	④自分たちが企画したレクリエーションでは、配慮の足りない点もあったが、失敗だったとは思わない。⇒⑤障害のある方も参加できるように工夫して、全員が参加できたのでよかったと思う。⇒⑥準備をもっと完璧にしておくべきだった。	②食事のペースが遅い高齢者の方を介助していたらむせた。⇒③寮母さんから「ゆっくりすぎると、高齢者の方も疲れるのよ」と言われ、食べる方も疲れることに気づいた。⇒④「もう少し口を開けてください」等話かけながら行くと、ペースが増した。⇒⑤納得して協力してもらった。⇒⑥納得して協力してもらった。	③援助場面における高齢者の疲れや恥ずかしさ、不安に気づくことができた。⇒④高齢者の方を敬う気持ちで介助を行った。⇒⑤そうすることによって、きめ細かいサービスが提供できると思う。⇒⑥実習で高齢者の方に対する考え方が変化した。今後のさまざまな場面で生かしていきたい。
学生D TEG:M型(適応タイプ) 高齢者:同居なし 肯定的(優しい、好き)							
実習1日目	実習2日目	実習3日目	実習4日目	実習5日目	実習6日目	実習7日目	実習8日目
①高齢者の方ができる範囲がわからず、援助に戸惑った。⇒②話しかけて返事がないことも多かったが、高齢者の方のもっと自分のことを知って欲しいと思うように感じられた。	②③入浴介助では、最初いやがっていた高齢者の方までもが、「気持ち良い」「ありがとう」と笑顔で言われ、何よりうれしかった。	②食事を拒否して部屋に帰った高齢者の方に⇒④世間話をしばらくした後、食事をすすめて下さった。⇒③満足した表情をされていた。⇒⑤接し方を考えれば高齢者の方も違う態度で接してくれることがわかった。⇒⑥押しつけるのではなく、コミュニケーションをとりながら、高齢者の方が納得して物事ができるように援助することが大切だとわかった。	②「楽しみがない」と言われた高齢者の方がおられたので、⇒④盆踊りにさそった。⇒③「楽しかった」と笑顔で言ってくれた。⇒⑤高齢者の方と一緒に楽しむことが大切だと思つた。⇒⑥自分も楽しんでレクリエーションをしようと思う。	③入浴介助は高齢者の方のプライバシーを考えて行わなければならない。寮母さんからその場に応じた気遣いが大切と教えてもらった。⇒⑥認知症の方でも、私達の表情や態度をよく見て感じとられていた。あたりまえの日常生活がすごせるように援助していきたい。	④学生が企画したレクリエーションを実施した。⇒③高齢者の方への配慮が不足する点があった。⇒⑤高齢者の方と一緒に楽しむことができたのはよかったと思う。	②家族の方が来られると、高齢者の方はうれしそうです。⇒③家族は高齢者の方にとってかけがえのないものであり、心待ちにされているようです。⇒⑤中には家族のいない方もおられます。家族のかわりにはなれないが、少しでも楽しくすごせるように、⇒⑥自分も力になれたらと思う。	④日に日に高齢者の方と合わせた接し方を考えられるようになってきた。⇒⑤一人一人に性格があり、個性があることがわかった。⇒⑥生活をまず支援する援助が大切であることがわかった。自分にとって大きな成長があった実習となった。

注) ①～⑥は、出会いの6段階のうち、どの段階に該当するかを示している。①患者と会う：物理的に会うこと、②患者の気持ちに“は”っとする、③患者に思いを巡らす、④患者に働きかける、⑤自分の存在を実感する、⑥次に繋がる目標がある：次はこうしたいという意味

資料 3

看護学生と要介護高齢者の出会いの段階 一経時的变化一 (3)

学生E TEG:M型(適応タイプ) 高齢者:同居なし 肯定的(優しい) 否定的(嫌い、おせっかい)							
実習1日目	実習2日目	実習3日目	実習4日目	実習5日目	実習6日目	実習7日目	実習8日目
①食事介助をしたが、話しかけても反応がなく戸惑った。⇒②初対面の人に介助されて、不安なためではないかと思った。 ① 高齢者の方とコミュニケーションをとった。質問には答えて下さるが、⇒②一方的な会話では迷惑になると思い、十分話せなかった。	①話しかけても高齢者の方から反応がないので、黙って車椅子を押していた。⇒②寮母さんから「声をかけてさしあげて」と言われ、高齢者の方の気持ちを考え反省した。	① 高齢者の方に「見張りに来たのか」と言われ否定を繰り返した。⇒②③ 高齢者の方の思いを否定するのではなく「元気にさされているか見にきました」と言えばよかった。	①自分で移動できる高齢者の方から、移動を手伝って欲しいと言われた。⇒②自分で出来るのにも思いついて手伝わら喜ばれた。⇒③ 高齢者の方はさみしく、誰か自分の側に居て関わってくれる事を望んでいることがわかった。⇒④ 多く接するようになっている。	①入浴介助を行った。⇒② 多くの人に囲まれての入浴は、恥ずかしいだろうと思った。⇒③ 自分だったらどのように介助されたいかと考えながら行っていたら、⇒④ 自然と高齢者の方と話しかけをしていた。	④自分たちが企画したレクリエーションでは、進行することだけに一生懸命で⇒③自分たちが楽しめなかったのも、高齢者の方も十分楽しめなかったのではと思う。⇒⑥十分に事前の準備をして、自分たちに余裕のある状態で次は実施したい。	① 高齢者の方から「何しに部屋に来たのか」と言われた。⇒② 困っていると「どうせ、しもの世話にきたんだろう」と言われ度々失禁していることを気にしていることに気づいた。⇒③ 失禁したことが恥ずかしくて、つらいからこのような態度をとるのだとわかった。	④おむつ交換の時、⇒⑤ 恥ずかしい思いをさせないように⇒④ 手早く確実に実施した。⇒⑤ うまくできて達成感が得られた。 ⑤さまざまな高齢者の方から声をかけてもらえるようになり、信頼関係の大切さを感じた。
学生F TEG:M型(適応タイプ) 高齢者:同居あり 否定的(嫌い、頑固)							
実習1日目	実習2日目	実習3日目	実習4日目	実習5日目	実習6日目	実習7日目	実習8日目
①食事介助では高齢者の方がどこまでできるかわからないので見ていた。寮母さんに「手伝ってさしあげて」と言われたが、リハビリのさまたげになってはいけないうちに、全部介助してしまおうかと思った。	①側に居た高齢者の方が熱を出していたのに気づかなかった。観察力が不十分だと思った。 ①入浴介助では、もし失敗したらと思う、うまく動けなかった。何をすれば良いのかと自分に問いかけてばかりいた。	②レクリエーションで高齢者の方が楽しそうにしていた。⇒③生きる喜びを味わって欲しいと思った。 ③ 高齢者の方が振動で不快にならないように気をつけて⇒④ 移送を行った。⇒⑤寮母さんにほめられ、私も役に立っていると実感できうれしかった。	③ 高齢者の方が盆踊りの練習に行きたいと言われたので、⇒④許可をもらって一緒に行った。⇒⑤ 高齢者の方は見ただけだったが、楽しかったと喜んで下さり、私の心もホッとごんだ。	② 高齢者の方に呼び止められたが、気持ちは伝わって何の言っているのか理解できなかつた。⇒③ 聞いていただけでうれしそうにはして下さるが、内容がわからなかったらどうなるかと思った。⇒⑤ 自分の殻に閉じこもらないよう、楽しみを見つけてもらうために⇒⑥ リハビリやレクリエーションに誘って、皆に何か楽しみを見つけて欲しいと思った。	④食事介助をしていたら、高齢者の方がむせてしまった。⇒⑤ 寮母さんが「大丈夫よ」と言って対応してくれたが、本当に誤嚥は恐く、食事介助の難しさを感じた。⇒⑥ 今後は体位の工夫や嚥下の確認等をしっかりとしながら介助しようと思う。	④ 高齢者の方の排泄介助をした。何とか自分一人で介助しようとしたが、結局寮母さんに助けてもらった。	④最終日で、これまで学んだ援助を実施して、⇒⑥ できた時には感動した。もう初日の私ではない。コミュニケーションの仕方もよくわかるようになり、高齢者の方々から「体に気をつけ」と言われはげみになった。次へのステップになった。

注) ①～⑥は、出会いの6段階のうち、どの段階に該当するかを示している。①患者と会う：物理的に会うこと、②患者の気持ちに“は”っとする、③患者に思いを巡らす、④患者に働きかける、⑤自分の存在を実感する、⑥次に繋がる目標がある：次はこうしたいという意味

資料 4

看護学生と要介護高齢者の出会いの段階 —経時的変化— (4)

学生G TEG:A 低位 (現実無視タイプ) 高齢者：同居あり 肯定的 (優しい、好き) 否定的 (怖い)							
実習 1 日目	実習 2 日目	実習 3 日目	実習 4 日目	実習 5 日目	実習 6 日目	実習 7 日目	実習 8 日目
① 高齢者の方にも話しかけても反応がないことが多く、立ったまま何もできないことが多かった。	① 水分補給の介助をしたが、飲んでもらえず困っていたら、寮母さんが飲み込ませる器具で介助した。はじめて見た。 ② ごはんに混ぜて薬を飲んでもらおうとしていたら、寮母さんから「あなただったらどう思うか」と聞かれ、⇒③ 高齢者の方の気持ちに気づき涙が出た。	① 食事介助ではどの位の量が嚥下できるのか等わからず不安だった。 ① 入浴の介助では何をすれば良いかわからず寮母さんに迷惑をかけた。	① レクリエーションをみせてもらったが、高齢者の方はとても楽しそうだった。	① 高齢者の方に「寒い」と言われたので寮母さんに伝えたら、「自分で考えて行動しなさい」と言われた。	④ 食事介助にこれまでの学んだことを意識的に取り入れてみた。高齢者の方が「いらない」と言われてからも、積極的にいろいろな話をしながらすすめてくれた。⇒③ 本当にそうだ。生きた意見だと思った。	② 高齢者の方が「体の不自由な人のベッドのまわりに置いてある物は、動かしたら元通りにしておかないと、自分で取れなくなるからね」と教えて下さった。⇒③ 本当にそうだ。生きた意見だと思った。	④ 食事介助の基本に戻って、体位を整えることからはじめて、コミュニケーションをしっかりと取りながら援助した。これまでなかなか食べて下さらなかった方がしっかりと口を開けて食べてくれた。実習で少しは高齢者の方とわかり会えたと思えた。
学生H TEG:AC 低位 (管理者タイプ) 高齢者：同居あり 否定的 (嫌い、腹が立つ)							
実習 1 日目	実習 2 日目	実習 3 日目	実習 4 日目	実習 5 日目	実習 6 日目	実習 7 日目	実習 8 日目
① 短時間での入浴介助は、流れ作業になっても仕方ないと割り切れない。	① 高齢者の方とのコミュニケーションは順調にはいかなかった。担当の高齢者の方は甘えて行動を依存している。 ① 入浴介助は機械的なケアになってしまっている。	① 寮母さんが、お世話のあり方等をお話して下さった。その後、高齢者の方とうまくコミュニケーションをとることができた。 ① 入浴介助は大変でも、高齢者の方から感謝の言葉を聞くのが、寮母さんにとってうれしい瞬間なのだろうと思った。	① 高齢者の方が「午後からお風呂行くのでよろしく」と私に言った。 ① レクリエーションに参加したら、高齢者の方の反応がよくて驚いた。	② 高齢者の方と話していたら「明日も来るの」と聞かれた。楽しみにしてもらっていると思うとうれしかった。	② レクリエーションで耳の聞こえが悪い方であることを知らず対応して、不機嫌にさせてしまった。⇒③ よく把握してからレクリエーションを行えば高齢者の方を不安にさせることもなかった。⇒④ 精一杯笑顔で接しよう。	② 高齢者の方が家族のこと等を話して下さり、耳を傾けていたら、とても良い顔をされていた。⇒③ 少しでも役立っていると思える。⇒④ 笑顔で接した。⇒⑤ このようにして、信頼関係が成立することを感じた。	⑤ 人間が人間を援助する意味を感じた。流れ作業と感じた自分が恥ずかしい。⇒⑥ 認知症の方への先入観がなくなったこのことが、自分の気持ちや行動に自然に反映されていると感じる。看護師になりたいと強く思った。

注) ①～⑥は、出会いの6段階のうち、どの段階に該当するかを示している。①患者と会う：物理的に会うこと、②患者の気持ちに“は”っとする、③患者に思いを巡らす、④患者に働きかける、⑤自分の存在を実感する、⑥次に繋がる目標がある：次はこうしたいという意味